

高分子分析研究懇談会 第 392 回例会報告

高分子分析研究懇談会第 392 回例会が、5 月 11 日（金）に明治大学・紫紺館で開催された。参加者は 67 名であった。まず総会が執り行われ、2017 年度運営委員長の渡辺健市氏（豊田合成）より 2017 年度の活動・会計報告と 2018 年度の運営委員の承認、2018 年度運営委員長の石田康行先生（中部大）より 2018 年度の活動計画・収支予算の議案が提出され、すべて認められた。その後、講演 2 件とワークショップ 2 件があった。

1 件目のご講演は、安藤慎治先生（東工大）による「芳香族ポリマーの光・電子・熱機能化のための新しい高分子特性解析法」であった。遠赤外吸収分光法と DFT 計算を組み合わせたポリイミドのコンホメーション解析やダイヤモンドアンビルセルによる超高压下での種々の分光分析による薄膜の立体構造と凝集状態との相関の解明、近赤外域光干渉測定による配向度と熱膨張異方性との関係の考察、偏光多角入射分解赤外分光法 (p-MAIRS) による熱イミド化過程での薄膜の面内配向度の変化の観察など、ポリイミドの光・電子・熱機能を理解するための新しい高分子特性解析法が紹介された。

その後、ワークショップとして 2 件のご講演があった。まず、松原功達氏（日産化学工業）による「振動分光法を用いた有機薄膜の分子配向解析」。有機 EL デバイスの正孔注入層として使用される HAT-CN の薄膜を Si 基板上で作製して p-MAIRS 法で解析した結果とともに、成膜法（蒸着や塗布・スピコート）によって膜内配向が大きく異なることが示された。また、和周波発生分光法を利用すれば膜表面の配向を調べることができ、液晶ディスプレイの液晶配向膜ではラビング処理によって表面にあるポリイミド分子が配向する様子が紹介された。

次に、中村貞夫氏（アジレント・テクノロジー）による「四重極型 MS における MassWorks ソフトウェアを用いる化合物の組成式推定」。キャリブランチピークから求めた補正関数を使って精密質量を決定して組成式を推定する方法や正イオン化学イオン化法のメカニズムが紹介された。また、ポリ塩化ビニル製マットの可塑剤として用いられるフタル酸エステルの分析事例が示された。

最後に、佐藤壽彌先生（元農工大・高知大）より「日本の大学教育の問題点」と題したご講演が行われた。大学の教育改革に関連した省令や単位制度の実質化の基準、海外の大卒比率・退学率などのデータを示されるとともに、長年大学教育に携わられた経験をもとに現在の大学・大学院教育に対する問題提起が行われた。

例会後、会場近くのイタリアンレストランで立食形式の交流会が開催され、講師を交えて熱気溢れる意見交換を行い、盛況のうちに終了となった。

〔徳島大学 平野朋広〕